海サクラ＆海アメ専用設計ボディ
Tide Minnow LANCE
海サクラ＆海アメ
Perfect GUIDE BOOK
歴史に
LANCEが
刻まれる。
タイドミノーランス誕生秘話＆
開発者に聞く使い分け術
NorthAngler's × DUO International NIPPON QUALITY
FREE ご自由にお持ち帰りください

各海域の海サクラ シーズンと釣り場概要

真冬からアングラーが通う
日本海

北海道の北端に位置する宗谷岬（稚内市）から、津軽海峡の東口に位置する恵山岬（函館市）までの間。広範すぎるので下にあるシーズンをまとめた表では道北・道央・道南の3つに分けた。振興局でいうと道北は宗谷・留萌、道央は石狩・後志、道南は檜山・渡島と捉えていただきたい。

開幕が早いのは檜山・渡島地方で12〜1月に第一陣が釣れ始める。シーズン初期は「小ザクラ」と言われる30〜45cmの小型が大半とはいえ、タイミングしだいで数がねらえるのが魅力。2月は水温の影響などからいったん釣果が落ちることが多く、再び上向くのは3月に入ってから。その頃になると60cm・3kgを超える良型も混じるようになり、後志地方の南部も盛期を迎える。

シーズンはゴールデンウイーク過ぎまで。後志の積丹半島や寿都、島牧、そして檜山地方は超大型があがることで知られ、4kgを超える魚体も珍しくなく、北海道の海サクラ釣りのメッカといえる。道央・道南日本海はサーフだけでなく、随所にみられる磯場も好ポイント。足もとから深い磯では岸近くまでサクラマスが追ってくるため、一定層をキープしやすいミノーが実績を上げている。

石狩や留萌地方は早い場所だと4月から釣れ始め6月までがシーズン。宗谷地方は稚内の開幕が早く、4月から釣果が聞かれる。どちらも後志以南より平均サイズは小さいものの、稀に60cm級も聞かれる。後志以南に比べるとアングラーの姿は少なく、のびのびロッドを振れるのがうれしい。

初夏からはヒラメねらいも
道南太平洋

北海道周辺の海流

襟裳岬から、津軽海峡の東口に位置する恵山岬（函館市）までの間。シーズンや盛期は道東太平洋とほぼ同様。

特に海サクラの釣果実績が高いのは苫小牧〜白老の海岸。比較的急深のサーフが目立ち、それほど遠投しなくてもヒットしやすい。60cmアップの大型もあがる。

また、豊浦や長万部、八雲のサーフや港も釣果が望める。このエリアは道内におけるヒラメのメッカといえ、初夏と秋はヒラメねらいのアングラーが押し寄せる。

60cm級もあがる
道東太平洋

納沙布岬（のさっぷ）から、襟裳岬（えりも町）までの間。オホーツク海と同様、サーフが主なポイントになる。

釣果情報が多く、ポイント開拓が進んでいるのは釧路周辺と十勝南部の広尾と大樹の海岸。いずれもオホーツク海より平均サイズは大きく60cm級も期待できる。シーズンは5〜8月で、盛期は6〜7月。

ウネリが大きく波足の長い道東太平洋では、ウエーディングするときは充分気をつけたい。ジグは30gほどが一般的。干満差が大きいため、干潮時のアプローチが大事。潮が引くとかなり前に行けるので、満潮時には届かない沖の深みを探ると貴重なヒットを得られるかもしれない。

GW頃からシーズン開幕
オホーツク海

宗谷岬（稚内市）から、根室半島の先端に位置する納沙布岬（根室市）までの間。

冬季はシベリア大陸沿岸で発生した流氷がオホーツク海を南下し沿岸に接岸する。そのため開幕は遅く、5〜7月がシーズン。ただ、枝幸などでは流氷が接岸する前の12月、オホーツク海で夏を越した後、南下する未成魚の「クチグロ」と呼ばれる小型サイズがねらえる。

この海域で海サクラ釣りが盛り上がっているのは網走周辺。近年は釣果がよく、大勢のアングラーが並ぶこともある。サイズは45cm前後が中心。遠浅のサーフがポイントになり、沖めでのヒットが多いことから、飛距離の出る30g以上のジグが欠かせない。

各海域のシーズン

エリア／月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
道北日本海				可	良	良	可					
道央日本海		可	可	良	良	可						
道南日本海	可	可	良	良	可	可						可
道南太平洋					可	良	良	可				
道東太平洋					可	良	良	可				
オホーツク海					可	良	可					可

DUO International NIPPON QUALITY 株式会社デュオ www.duo-inc.co.jp 〒421-0201 静岡県焼津市上小杉701

美しさとパワーで魅せる白銀の砲弾

海サクラ

サクラマスの生活史

北海道の全域で見られるサクラマスは、産卵は河川で行ない、その後幼魚が海に降りて大きく育ち、再び川に戻ってくる。一方で生涯海に行かない河川残留型はヤマメ（北海道ではヤマベ）と呼ばれ、見た目もサイズも異なるものの、実際には同じ種類の魚である。

広い海で豊富なエサを食べたサクラマスは大きく育つ。ヤマメの場合は体側にパーマークと呼ばれる黒っぽい小判型の模様が残り（パー＝parrはサケ科の幼魚の意味）、大きくなっても30㎝前後なのに対し、60㎝、70㎝という見事な体躯になり、釣り人を魅了する。

サクラマスの産卵場所は、本流あるいは支流の上流域。時期は地域によって多少異なる。11～12月にふ化した仔魚は、1年半～2年半をかけて10～20㎝に育ち、一部はそのまま川で生活するものの、残りは海に降りていく。北海道では、メスのほぼすべてとオスの約半数が降海型になるといわれる。海へ向かう個体はパーマークが消えて体が銀色になり（銀毛、スモルトと呼ばれる）、4～7月に川を下る。この海に行くヤマメを保護するため、各振興局所管区域の内水面では、北海道漁業調整規則により、ヤマメの採捕禁止期間が定められている。

その後1年間ほど海ですごしたサクラマスは、4～6月、沿岸部に寄る。このタイミングが、いわゆる海サクラの釣りシーズンとなる。その後、魚たちは川を遡上し、8月下旬～10月に産卵する。なお、産卵は川に残ったオスも加わって行なわれる。

サクラマス×アメマス 北海道人気魚種の素顔に迫る

Text by Hiroki Hirasawa

ショアの釣りのルール

本州では、サクラマス釣りといえば大河川の本流で行なうのが一般的。だが北海道では水産資源法、北海道漁業調整規則により河川内での釣りは禁止されている（サケ、カラフトマスも同様）。そのため、海（または一部の湖）でねらうことになる。

ただし、海ならどこでも釣りをしてよいわけではない。岸から釣る場合、ポイントによっては河口付近での釣りが禁止されている「河口規制」がある。河口規制で定められた禁止期間&区域は絶対に守らなくてはならない。分からない場合は、事前に北海道水産林務部発行の『フィッシングルール』（釣具店などに小冊子が置かれているが、HPでも確認できる）あるいは現地の標柱などで規制区域を確認してほしい。

北海道では冬から夏までねらえるサクラマスは、トップクラスの人気ターゲット。その性格はアグレッシブで、ルアーによく反応する。「海サクラ」と呼ばれて親しまれ、わざわざ本州から遠征する人も増えている。

しかし、北海道は広い。とくに初心者の場合、どこで釣りをすればよいのか見当がつかないだろう。また道内ほぼ全域で釣れるとはいえ、エリアによって盛期はずれる。そのため、この付録の最後に振興局ごとの概要をまとめておきたい。釣行の参考にしてほしい。

数ある道内ターゲットのなかでもトップクラスの人気を誇るサクラマス。決して簡単にキャッチできる魚ではないが、それだけに虜になるファンが多い

サクラマスの河川残留型はヤマメ（北海道ではヤマベとも呼ばれる）。道内での釣りルールは本州とは少し異なるので注意が必要

5kg超モンスターの可能性も

海アメ

アメマスの謎多き生態

冬から春のショアでねらう釣りものとして、サクラマスと並んで重要なターゲットがアメマスだ。残念ながらコロナ渦により2021、2022年の『あめますダービーin島牧大会』は中止になったが、島牧の海アメといえば本州から訪れるファンも多い。

海で成長する降海型はアメマス、河川残留型はエゾイワナと呼ばれる。湖などで大きくなった個体もアメマスと呼ぶケースが多く、定義は曖昧といえる。アメマスの生態については、いまだ解明されていないことが多い。アメマスは何度かに分けて卵を産むが、時期は9～11月。産卵後も生き残る個体がいる。

降海型は15～20㎝になると3～5月に海へ移動。その後沿岸域で生活するといわれる。6～8月には川に戻り、越冬後に再び海へと降りる。このように海と川を行き来して、数年後に成熟するといわれるが、地域によって生活史は変わるようだ。

2000年頃からミノーがブームに

アメマスは偏食傾向が強く、スカッド（小型の甲殻類）を食べているときなどは、なかなかルアーに反応しないといわれる。そのためフライフィッシングでも人気のターゲットになっている。一方、オオナゴなどの魚を捕食している状況ではルアーを活発に追う。

1990年代は、海アメねらいではジグでよく釣られていた。細いシルエットで飛距離の出るミノーが使われるケースもあったが、基本的にミノーはナギの日に使うルアーというイメージだった。

そんな流れが変わったのが、2000年以降。若い世代を中心にミノーを使う人が徐々に増えていく。そして2001年、「ミノー＝ビッグ海アメ」という流れを作ったのが、デュオ『タイドミノースリム120』（120㎜13g）。このルアーでキャッチされた同年の海アメダービー総合優勝魚は、大会史上初となる4・5kg。サイズは75㎝だった。

冬から初夏にかけて、ショアからのターゲットとしてはアメマスも外せない。またロングミノーの歴史を語るうえでは『あめますダービーin島牧大会』の存在も大きい

北海道におけるロングミノーの可能性

2004年頃から、ミノーの主流サイズが120から140㎜クラスに変わっていく。そのきっかけになったのは、2003年シーズンに登場した『タイドミノースリム140 5th Anniversary』（140㎜19g）。以後、デュオからは「ウミアメリミテッド」という名を冠した140㎜22gのシンキングモデルがリリースされ、海アメファンのマストアイテムになった。

島牧の海アメは2006年から、ミノーのサイズが170㎜クラスの時代に入った。このブームを作ったのは『タイドミノースリム175』（175㎜27g）。同年のダービーでいきなり優勝ルアーに輝いた。

2008年にはシンキングタイプ『タイドミノースリム175フライヤー』（175㎜29g）が登場。170㎜クラスの時代を引っ張った。

近年、海サクラは磯での釣果が脚光を浴び、ロングミノー全盛の時代を迎えている。また、ソルトシーンにとどまらず、湖や川のトラウトフィッシングでもロングミノーは期待の星。支笏湖では80㎝超のブラウントラウトがキャッチされ、川でも釣果情報が増えている。こうして振り返ると、昔も今もフィールドを問わず「ビッグフィッシュ＝ビッグベイト」という理論は変わらないのだろう。それに大きな（長い）ルアーで釣ると理屈抜きに面白い。

今、釣具店に行くと魅惑的なミノーがたくさん並んでいる。スペックで分かる傾向は一昔前のミノーに比べ、同じサイズでも重いこと。広大なフィールドで欠かせない遠投性能を重視しているのだろう。それに伴ってか、シンキングタイプが主流になりつつある。

海アメから始まったムーブメントが、今後どのように広がり、各フィールドのモンスターを誘うのか。楽しみでならない。

『North Angler's』2006年3月号の巻頭は、発売当初から驚異的な海アメヒット率を誇った『タイドミノースリム175』による実釣記事だった

海サクラ・海アメの歴史にLANCE（＝槍）が刻まれる。

タイドミノーランス

Tide Minnow LANCE 140S（上）
Tide Minnow LANCE 120S（下）

誕生までの道のり

これまで海アメ、海サクラシーンを牽引してきたタイドミノー。道内でも高い人気を誇るシリーズに、『タイドミノーランス』が加わった。ネーミングの由来は、向かい風を貫くような鋭い槍（LANCE）。道内の海サクラ、海アメに的を絞った専用設計ボディーで、2021年に120S、140S、そして2022年1月には110S、3月には160Sも加わった。その開発秘話を、株式会社デュオの代表を務める安達政弘さん、そしてテストを行なった福士知之に聞いた。

安達政弘

もともと北海道で海アメ、海サクラが流行った23～24年前から、タイドミノースリムの120～200サイズを作っていました。200㎜は北海道を意識しましたが、当時それを見た福士知之さん（D-3カスタムルアーズ代表）からは「これ、ボックスに入りませんよ」と言われてしまいました（笑）。道内では、175㎜が支持を集めましたね。

もともとは本州でシーバス用に開発したものを、北海道仕様にアレンジしていましたが、北海道の海サクラ・海アメのために一から開発したのが『タイドミノーランス』です。一昨年くらいから福士さんの協力も得て、完成まで漕ぎつけました。

オオナゴなどを追っているサクラマスは、ミノーにとてもよく反応してくれます。飛距離を重視するあまり太くなると、理想的なシルエットではなくなってしまいます。かといってタイドミノースリムのように細くすると、ウエイトが乗せられず飛距離が出ません。そのあたりのバランスにはこだわっています。2021年2月からは自分でも北海道を訪れ、テストを重ねていました。

最初に120㎜と140㎜、さらに追加で110㎜と160㎜が加わりましたが、160㎜はイトウにも対応できるサイズです。サクラマスが追っているオオナゴは20㎝を超えるものも多いので、160㎜でも決して大きくはないと思います。110㎜は、魚が追っているベイトが小さいときのために加えました。

福士知之

第一印象は、ミスキャストが少ないということ。単純に飛距離だけでいえば、もっと飛ぶミノーはあると思います。でも、実際に使うにあたっては、安定して飛んでくれることが大切です。またアクションに関しても、海サクラ・海アメ用として調整していて、トータルのバランスがよいルアーに仕上がっていると思います。

安達政弘（あだちまさひろ）
株式会社デュオ代表。ルアーデザイナーとして、これまでに数多くのヒット作を生み出してきた。北海道の海サクラ・海アメに関しても幾度となく釣行を重ねており、福士さんとは25年来の親交がある。

福士知之（ふくしともゆき）
D-3カスタムルアーズ代表。道内有数のルアービルダーであり、淡水・海水を問わずトラウトルアーフィッシング全般に明るい。『タイドミノーランス』の誕生にも深く関わっている。

タイドミノーの系譜 ～The History of TIDE MINNOW～

1997

タイドミノーリップレス
シーバスをターゲットとする新たなブランドを設立。タイドミノーシリーズが誕生

1998

タイドミノースリム120
タイドミノー120SR
DUO初となるスリムボディー形状・3フックモデルのルアー。シーバスルアーのスリム化を加速させた原点的なモデル。『タイドミノースリム120』は登場以降、大型海アメに絶大な効果を発揮し、道内における人気を確固たるものにした

1999

タイドミノー120SSR/LD
タイドミノー105SR/SSR
水絡みを重視し、スローシンキングに設定された高比重ボディー。サラシの中でも対応できるモデル

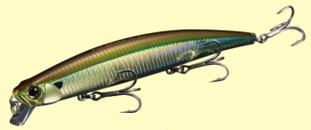
2000～2003

タイドミノースリム90/105SR/135SSR
タイドミノー75F/CD
タイドミノー90F/CD/SSR
タイドミノースリム105SSR
タイドミノー105LD
タイドミノースリム140
固定ウエイト設計で、デッドスロー・シャロー攻略を目的としたスーパーシャローレンジ攻略モデル。2003年に登場した『タイドミノースリム140』は、海アメ・海サクラ用ミノーの主流サイズが120㎜から140㎜に変わっていく先駆けとなった

2004

タイドミノー135 SURF
タイドミノー105
タイドミノースリム140 Flyer
薄さと強度を得られる金属製のリップを採用。ヘビーウエイト設定では不可避なアクションレスポンスの低下を抑え、キャスト性能を特化させたヘビーシンキングミノー

2005～2006



タイドミノー90S
タイドミノー120/150 SURF
タイドミノースリム175
タイドミノー75CD
アピール重視のミドルシェイプボディー形状。バランスを崩しやすいウネリや引き波の中で使えるフローティングミノー。2006年に『タイドミノースリム175』が生まれたことにより、海アメシーンはいよいよ170㎜クラスのミノーが活躍する時代に入った

2007～2008

タイドミノー125/145SLD-F
タイドミノーリップレススリム
タイドミノースリム175 Flyer
タイドミノー125/145SLD-S
初代タイドミノーリップレスのスリムボディー版が誕生。表層系のルアーでなければ使えなかったポイントでナチュラルスイムアクションを実現

2009～

タイドミノースリム200/200 Flyer
タイドミノー75S
タイドミノー75 Sprint
タイドミノースリム140/140Flyer
タイドミノースリム120 Flyer
デザインを一新させ、体高を抑え、ヘッドとテールを大胆に絞り込んだ新たなアウトライン。使い手に200㎜のサイズを感じさせないタイドミノーシリーズ最長モデルも登場

参考:TIDEMINNOW スペシャルサイト
URL=https://www.duo-inc.com/sp-tideminow/

デュオスタッフの谷口智史さんが『タイドミノーランス』で釣った良型サクラマス

開発者に聞く ランスの使い分け

計4サイズとなったモデルを、フィールドではどのように使い分けるのか？　引き続き安達さんと福士さんに、その点について話をうかがった。

4つのサイズ、まず何を選ぶ？

安達政弘

一般的には、魚が捕食しているベイトに合わせるという話になるでしょう。

私の場合は、迷ったら大きめをチョイスしています。最近はあまり見なくなったのですが、ルアーが届かないような沖でオオナゴを追っている光景を散々見てきたので、なんとなく大きめになってしまいます。ただ、明らかにオキアミや小魚を追っているときは110㎜でも大きいので、その場合は素直にメタルジグを選べばよいと思います。

時期、あるいは個体にもよると思いますが、本州の川のサクラマスと同様に、海サクラも偏食するのはオキアミなど、ごく限られた状況のときだけだと考えています。

まとめると、基本は140㎜。気分転換で120㎜か160㎜。「ホッケや海アメ、小サクラなどでもいいからとにかく釣りたい！」という追い詰められた状況では110㎜という感じでしょうか。

福士知之

メインとなるのは140㎜と120㎜。この2サイズはシーンを選ばないので、自分のキャスティング技量やタックルに合わせて選択すればよいと思います。ミノーの存在感という点で考えるなら、波など水面のざわつきが多い状況であればボリュームのある140㎜。海面が穏やかなら、ロッドアクションでの操作が容易でダート幅の広い120㎜が軽快。北海道のアングラーはサイズの数値で140㎜のほうを選択する人が多いと思いますが、120㎜の飛距離と立ち上がりの速さは特筆ものだと感じています。

サイズでのローテーションも効果的ですが、ミノーは他のルアーに比べアクションの速度域が広く、水中で止められるという絶対的な利点があるので、これを活かすことが大切です。速めのタダ巻きでチェイスがあるけど食わない場合は、途中で1秒ほどストップを入れてみる。あるいは超スローで巻きながらジャークやトゥイッチを繰り返すなど、ミノーならではの誘い方があります。

そういった工夫を試してもらいたいですね。

色の迷路で迷わないために

もうひとつ、アングラーが悩むのはルアーのカラーについて。2人のベテランが語る北海道の海における実績カラーとは？

安達政弘

よく営業から怒られますが、カラーで悩むのはそれほど意味がないと考えています。ミノーの場合は、赤金系、青銀系、緑銀系を主体に、パールチャートバック、レッドヘッドをたまに使うくらい。

ジグミノーやメタルジグはミノーよりアピール力が弱いので、ピンクシルバー系、チャートシルバー系を主体に安定の赤金、青銀、緑銀といった選択をします。

海サクラにハマっていた初期の頃は、カラーに関する持論、考察などもあったのですが、つかんだ！と思ったら気のせい……の繰り返しなので、最終的には考えないようにしました。

いろいろな意見があると思いますが、釣れているカラーが正解なので、周りで釣れているカラー、自分の自信のあるカラーを迷わず投げることが大事だと思います。

福士知之

色に関しては皆さんの好みというのが大きいと思いますが、ピンクや赤色など派手なアトラクター系カラーと、ベイトを意識したオオナゴやカタクチなどシルバーベースのナチュラル系（ベイトカラー）の2～4種類は揃えておきたいですね。

私はアトラクター系ではピンク＋シルバーとレッド＋ゴールド（赤金）。ナチュラル系でカタクチ（シルバーベース）とオオナゴ（シルバーベース）という4種で基本的なローテーションをしています。潮の澄んでいない太平洋岸では黒っぽい色を使用することもありますが、ほとんどは前記の4色ですね。

カラーローテーションについて、一日の中で時間割を作るとすれば、朝夕のマヅメ時はアトラクター系、日中はナチュラル系という感じです。

シーズン後半など、岸寄りしている魚が古い場合は、ルアーの種類にかかわらずピンクや赤などのアトラクター系を中心にルアーを結びます。ちなみに私なりの見方としては、「跳ねが頻発してルアーが届いているのに食わない」とか「釣れた魚のウロコが剝がれにくい」というときは、古い群れだと判断しています。

また磯場などで「魚がルアーの後ろから付いてくるのに食わない」という場合は、結んでいる色と同色のままルアーのサイズを極端に小さくします。たとえば140㎜ミノーのピンク色でチェイスはあるけど食わないというのであれば、小型の軽量なメタルジグやジグミノーのピンク色に替えるといった感じです。

基本的には最初に大きめのルアーを選ぶという安達さんと福士さん。昨年2月中旬のテストのようす

もちろんランスはアメマスにも効く

DUO Tide Minnow LANCE LINE UP

01 タイドミノーランス110S

発売以来、道内で数々の実績を出している『タイドミノーランス』。2022年春に、そのダウンサイジングモデルとなる110Sが登場。ベイトのサイズが小さな時期や、スレた大型魚に対応するモデルだ。サイズを抑えながらも、その飛距離はランス＝槍の名に恥じない性能をキープ。

●サイズ：110㎜　●重量：14g　●タイプ：重心移動・シンキング　●レンジ：0.3～1m　●カラー：グリーンゴールドRB、オオナゴ、ピンクバックシルバー、ブルピンウロコ、サクラピンクゴールド、リアルオオナゴ、リアルカタクチ、ダブルアカキン、HKI　●価格：1,980円（税込）

02 タイドミノーランス120S

海サクラ・海アメ専用設計として、ロングディスタンス性能と艶めかしいベイトフィッシュのようなアクションを実現。細すぎないボディーに、タングステンウエイト3個、スチールウエイト1個を内蔵し、ベストバランスを追求。向かい風の中でも切り裂くように飛び、飛行姿勢も安定するよう設計し、ストレスフリーなキャストを可能にした。アクションはベイトフィッシュを意識したウォブンロールアクション。スローシンキングながらジャーク、トゥイッチに素早く反応してくれる。

●サイズ：120㎜　●重量：17.5g　●タイプ：重心移動・シンキング　●レンジ：0.3～1m　●カラー：ブラックバックイワシ、グリーンゴールドRB、オオナゴ、ピンクバックシルバー、リアルオオナゴ、リアルカタクチ、HKI、グリーンバックシルバー、ダブルアカキン　●価格：2,090円（税込）

03 タイドミノーランス140S

120Sと同様に、向かい風の中でも切り裂くように飛び、飛行姿勢も安定するよう設計された。アクションはベイトフィッシュを意識したウォブンロールアクション。スローシンキングながらジャーク、トゥイッチに素早く反応してくれる。

●サイズ：140㎜　●重量：25.5g　●タイプ：重心移動・シンキング　●レンジ：0.5～1m　●カラー：ブラックバックイワシ、グリーンゴールドRB、オオナゴ、ピンクバックシルバー、リアルオオナゴ、リアルカタクチ、HKI、グリーンバックシルバー、ダブルアカキン　●価格：2,200円（税込）

04 タイドミノーランス160S

海サクラ、海アメのベイトフィッシュであるオオナゴを意識した160㎜サイズ。ビッグフィッシュには大きめのルアーが効果的というアングラーは多い。北海道では今後の定番になるであろうロングミノーだ。

●サイズ：160㎜　●重量：28g　●タイプ：重心移動・シンキング　●レンジ：0.5～1.5m　●カラー：グリーンゴールドRB、オオナゴ、ピンクバックシルバー、ブルピンウロコ、サクラピンクゴールド、リアルオオナゴ、リアルカタクチ、ダブルアカキン、HKI　●価格：2,310円（税込）

桜ブームとルアーのトレンド

道産子アングラーが振り返る

写真・文＝福士知之
Photo & Text by Tomoyuki Fukushi

3つの理由

島牧村を中心として盛り上がっていた海アメの釣りが、爆発的な海サクラブームに変遷していった理由はいくつかある。

第1の理由は、魚が美しいこと。第2に、ねらえる季節が限られていること。期間限定だと、釣欲には火がつく。そして第3の理由は、釣った魚をキープできること。

誌面などでリリースの大切さを伝えてきたが、それが少々過剰になり、釣り人に窮屈な思いをさせていた部分は否めない。もちろん、リリースは大切。砂浜で無数に並べられた魚の写真を見ると「こんなに持って帰ってどうするんだろう」と思う。だが規定のある区域でない限り、釣った魚をリリースするか否かは当人の自由。あくまで魚を守る意図を持ってリリースするべきで、たとえば掛かり所が悪くて死にそうな魚を、無理に逃がしても意味がない。

こうして考えてみると、季節に違いがあるだけで、条件はサケ釣りと同じということが分かる。海アメはキャッチ&リリースが定着していて、ほぼルアー&フライアングラーのためのゲームフィッシングという位置付けだが、海サクラはルアー&フライではない釣り人も魅了したので、大ブームになったのだと思う。

桜ルアーのトレンド

海サクラで使われるルアーは、海アメですでに確立されていたので、ほぼ変わらない。ルアーのトレンドが変遷する理由は、人気ポイントの変化によるものだろう。

十数年前まで、アングラーが並ぶのはサーフやゴロタ場がメインだった。そのため遠投性能に長けたメタルジグやジグミノーが主流だった。ポイント開拓が進むにつれ、やがて他魚も含め魚とのコンタクトが多い磁場が人気になった。足もとまで回遊が期待できる磁場だと遠投性能は必要とされず、アピール力に優れたルアーのほうが釣果を期待できる。そのためミノーが人気を博すようになっていった。

したがって磁場が主戦場である間は、今の状態が続くと思う。もし今後サーフに釣り場が移ると、またメタルジグやジグミノーが人気になるかもしれない。

アピール力はやっぱりミノー

磁場など、魚の回遊ルートが近くて射程圏内に魚がいるのであれば、最もアピール力が高くターゲットをねらいやすいのがミノーだ。ルアー本来のアピール性能に長けるだけではなく、水中でルアーを止めて誘えるのはミノーだけ。「タダ巻き」、「ストップ&ゴー」、「ジャークまたはトゥイッチ」など、状況に合わせてさまざまな誘い方ができる。

速度については、私はかなりゆっくり引くほうだ。魚が掛かってからも、できるだけ暴れさせないようにゆっくり寄せる。

その他のルアーも含めた使い方を解説しておくと、最初に結ぶことが多いのがピンクのジグミノー。これはサーチベイト的な意味で使うことが多く、まずはどこに魚がいるのか知るために広範囲を探る。基本操作はタダ巻き。浮き上がりが速いため、海藻の多いポイントでも根掛かりしにくい。そして近くに魚がいると分かれば、ミノーに変更する。

ちなみに広範囲を探るだけならメタルジグでもよさそうだが、メタルジグはリトリーブスピードが速くなるので、近くで魚が掛かったとしても、遠くから追ってきて食った可能性を捨てきれない。そのためサーチベイトとしてはジグミノーがベターだと考えている。

メタルジグは最も遠投性能が高く、強風や強いウネリなどの悪天候に強い。またベイトがサケ稚魚のように小さいときにも有利。操作の基本はタダ巻き、またはジャークを織り交ぜた誘い方。ミノーやジグミノーなどのプラグに比べ、リトリーブ速度は速くなる。

海アメ・海サクラ釣りのタックル&装備

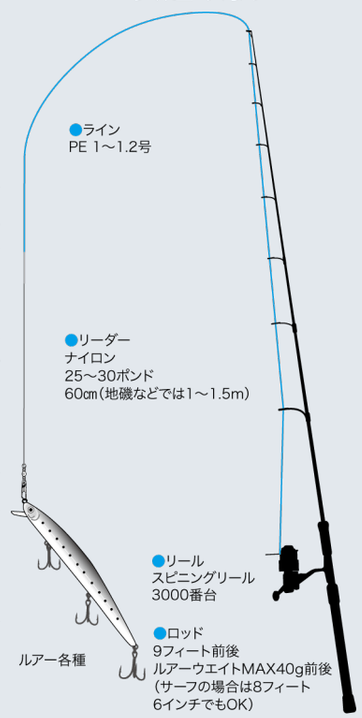
一日中振っても疲れにくいように、体力に合わせたロッドを選ぶことが大切

寒さ対策と安全対策に尽きると思いますが、寒さ対策に関しては調整可能なように薄いダウンかフリースをシャツとダウンの間に挟みます。アンダーシャツ上下、ソックスは今風のヒート素材よりはメリノウール一択。濡れたときに強いのが理由です。

安全対策として、地磁は極力浮力材の入ったゲームベストを着ています。機動力を考えてウエーダーはソックスタイプのゴア系。シューズに関しては、高級モデルは意外と重くて硬いので、なるべく軽くて履きやすいものを選びます。ソールは好みが分かれると思いますが、一足でさまざまな状況に対応するなら、フエルトスパイクが無難だと思います。ただし基本的にはよく行くフィールドに合わせて、滑りにくいものを選びましょう。

グローブは、仮に寒くなくても装着したほうがケガの危険が減ります。また魚もつかみやすいので、装着したほうがよいでしょう。寒い時期は複数所持して、濡れたら交換するようにしています。

安達政弘さん



地磁メイン、または1本で多くの状況に対応する場合は、9フィートクラスで40gのメタルジグが振りぬける硬さのロッドを選びます。一方でサーフメインの場合は、8フィート6インチくらいのほうが快適だと思います。その場合でも必要なのは40gのメタルジグが振り抜ける硬さ。メーカーによって多少違いますが、MHクラスは必要だと思います。

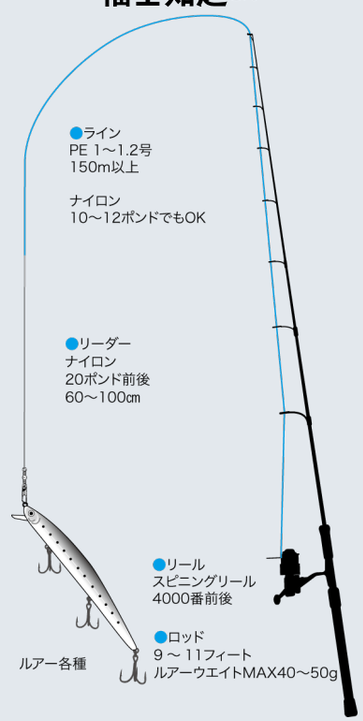
あとこれはあくまで私の場合なので、場所に合わせるだけでなく、体力と実釣時間も考慮したほうがよいでしょう。そして使用ルアーを振り抜けて、なおかつファイト時に取り回しやすい長さ、重さを基準にするのがおすすめです。

私の場合は基本遠征で釣り時間が長いので、足場の高い磁以外はブラキストンの8フィート6インチモデルで4ピースのロッド（BKT-806MH4）を使っています。

リールはスピニングの3000番前後で、ラインはPE1〜1・2号、リーダーはナイロンの25〜30ポンドです。

結び目を巻き込まないくらいのリーダーにする場合は、三つ編みダブルラインに小さめローリングスイベルか打ち抜きリングをスイベルノットで装着して、その先に60㎝のリーダーというシステムにします。地磁などでリーダーを長く取る必要があれば、FGノットで接続し、リーダーの長さは1〜1・5m。いずれの場合でもスナップは使わずに、打ち抜きリングにSPリングでルアーを装着しています。

福士知之さん

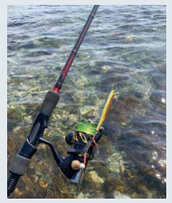


個人の体格やスタイルにもよりますが、一般的にはロッドは10フィート前後（9〜11フィート）で、ルアーウエイトのMAXが40〜50gのパワーがあるタイプがよいでしょう。

リールサイズは4000番前後。自分が使用するラインを150m巻けるもの。遠投が必要なので、横風の強いときに出るイトフケを素早く回収できるハイギアタイプがおすすめです。

ラインはPE1〜1・2号を150mは巻いておきたいですね。ナイロンラインであれば10〜12ポンドです。メインラインにショックリーダーとして、20ポンド程度のリーダーを60〜100㎝、好みの長さで接続します。

メインラインとリーダーを結ぶラインシステムはどの結び方でもよいですが、自信のあるノットで確実に結束することが大切です。FGノットやPRノットなどの摩擦系ノットに自信がない場合は、メインラインの先端10〜15㎝をビミニツイストなどでダブルラインにしておき、そこにリーダーを電車結びで接続するか、小さな溶接リングやスイベルを利用して接続する方法もあります。この2つの方法で接続する場合は、結び目やリングをトップガイドに入れないように注意が必要。とくにリングやスイベルは、トップガイドに当たるとガイドが破損する危険性があるので要注意です。



福士さんは、自身が手掛けるD-3カスタムルアーズのロッドを愛用。リールは4000番を使用している

ポイント問わず必須なのはゲームベスト（ライフジャケット）と、フックを外すためのハリ外しまたは長いプライヤーです。

ライフジャケットは説明するまでもなく、万が一に落水したときの安全確保のため。さまざまなタイプがありますが、注意したいのはルアーなど道具類の詰めすぎです。ルアーが多いとかなりの重量になるので、詰めすぎるとベストとしての機能を妨げてしまいます。あくまでもメインで使用するルアーをベストのポケット、予備ルアーはバッカンやタックルバック等に入れておくほうがよいでしょう。

この釣りでは使用するミノーが長いため、魚に掛かったフックを外す際、短いプライヤーだと魚が暴れてフックが手に刺さる危険性があります。最近は専用のハリ外しを装備するアングラーが増えているようです。

あと、磁場であれば磁ダモ&ランディングシャフト（4〜5mの長さがあると便利）は装備しておきたいですね。

160㎜のミノーを使うとなると、フックを外すときにロングノーズのプライヤーがあると便利

広大な北海道 海サクラはどこにいる……？

小河川も見逃せない

サクラマスはサケのように生まれた川に帰る習性が強く（＝母川回帰）、その生態から母川の近くが絶好のねらいめになる。何といっても好ポイントはヤマメの魚影が濃い川だ。

北海道では、周年すべての水産動物の採捕が禁止されている「保護水面」と、指定期間知事指定魚種（ヤマメ）の採捕が禁止されている「資源保護水面」がある。どちらも釣り禁止のため、通常の川よりもヤマメの魚影は濃いと推測される。これに注目するのはアングラーなら当然といえよう。実際、海サクラ釣りのブームは、保護水面と資源保護水面の河口域から始まったといってよい。

とはいえ、釣りの規制がない川の河口域にも好ポイントはとても多い。ヤマメさえいれば、見過ごしてしまいそうな小さな川の近くにもサクラマスは岸寄りする。ヤマメは全道各地の川に生息している。人気の高い河口域はアングラーが大勢並び、魚には強いプレッシャーが掛かっている。アングラーの少ない河口を釣り歩いてポイントを開拓するのも面白い。また、川が流れ込んでいなくても、地形に変化が多くエサの豊富な磯周りでも釣れる。サクラマスのエサとなる小魚などが多い障害物や海藻付近は要チェックポイントのひとつだ。

立入禁止を増やさないために

札幌近郊を中心に、残念なことに立ち入りが制限されたポイントが年々増えている。その主な原因は、立ち入りが禁止されている場所への進入や迷惑駐車、そしてゴミのポイ捨て。ゲートや看板などで示されている立入禁止の場所に入るのは言語道断。また、私有地の進入にも注意したい。駐車の際は漁業者や近隣住民の邪魔にならないように。コンブ漁が盛んな地域では、コンブ干し場での迷惑駐車がよく聞かれる。

自分の出したゴミを持ち帰るのは当たり前。少しでも落ちているゴミを拾って帰るくらいの心のゆとりがほしい。そして汚い話だが、糞尿も大きな問題になっている。小便だけでなく大便を地域の人たちが使っている敷地内や、漁師さんの仕事場でしてしまうのは迷惑極まりないことだ。

森が近くにあるヒグマの多い場所の海岸で、魚の解体をするのはNG行為。ヒグマの誘因につながるからだ。魚の解体は道の駅など公共の施設でも行なわないこと。釣り場でするのは美味しくいただくための血抜きだけにしておきたい。

海サクラ釣りのゴールデンタイムは朝マヅメ。アングラーにとっては心躍る時間帯とはいえ、その地域に住む人にとっては貴重な休息タイム。特に民家が近い場所では、話し声やドアの開閉に配慮したい。

いい釣りをしてもしなくても、釣り場近くの店で土産を買ったり入浴したり、あるいは宿泊したり、地元に喜ばれるアングラーになろう。

福士知之さんのポイント選択術

昨今はSNSや釣具店のホームページなどで、地域を問わずタイムリーな情報が手に入れられる時代です。そのため、初心者でもあまり困らないのではないでしょうか。

ただし私はどちらかというと混んでいる場所が苦手なので、情報が多く出ているポイントは、あえて外して釣行します。

基本的には天候や波など、気象条件で大まかなエリアを決めています。実際に入るポイントは、現地に着いてから人や波の状況で判断します。

サーフでは離岸流などはあまり気にせず、飛び根のある箇所を探ることを優先します。磯場では潮通しのよさそうな場所がねらいめ。どんな釣りでもポイントをあちこち移動せずに決め打ちするタイプなので、潮の状況変化を観察しながら、のんびりと釣りをしています。

安達政弘さんのポイント選択術

私の場合は完全に遠征組なので、福士さんや清竿堂の二橋翔大さんに情報をもらいます。SNSより、そういった生の情報を最重要視しています。魚の接岸状況はもちろんですが、河口規制などのルール、駐車場所なども、SNSの情報より正確だと思うからです。たとえば駐車場所などが間違った情報だと、地元の方にも迷惑をかけてしまいます。

最近は空撮マップ、天気予報アプリなども場所選びに有効ですが、地磯などは初見だと危険なので、基本的にはエキスパートの方々に聞くようにします。

ポイント選びについてですが、初心者の場合、何らかの情報で「釣れている」サーフが分かったら、迷わず朝イチに入るのがおすすめです。朝イチを外したとしても、数尾以上あがったサーフは数時間おきにポツポツ釣れる可能性が高いので、手詰まりのときは粘ったほうがよいと思います。

以下はあくまで推測ですし、地形的に例外もありますが、サクラマスは他の回遊魚と違って波打ち際を岸沿いに回遊するより、沖から海岸線に縦に近づいては離れるといった行動が多いようです。実績のある場所は、これといった変化がないサーフでも確率は高いと思います。

場所選びに関しては、あまり悩んでも意味がないので、自信を持ってキープキャストが大切です。

「タイドミノーランス生みの親」安達政弘さんに聞く

市場動向から見た海サクラ・海アメの歴史

海サクラ・海アメが流行し始めた頃から北海道に通っている安達さん。ルアーメーカーの目から見た、この釣りの歴史とは……

2000年頃はまだ海アメが主流で、海サクラに関してはその数年後に本格的なブームが来たようです。そのため市場規模、アングラーの数は2000年代前半、遅くとも2005年頃に逆転したのではないかと思います。

他の釣りでもそうですが、海サクラで使われるルアーも時代ごとに変わっていきました。トレンドの初期はメディアの影響を受けやすく、また新規参入のメーカーは安定市場になるかどうかようすを見るので、使われるルアーは偏りがちです。現在は市場も成熟し、またアングラーの情報取得方法も多様化が進んでいるので、ルアーも多様化しています。

ざっくりとした考察になりますが、海アメに関しては「メタルジグ→ロングミノー→ジグミノー」と変化したようです。ジグミノーの頃には市場が成熟し、皆さん思い思いのルアーでねらっていたように感じます。

海サクラについては、アングラーのホームフィールドによってさまざまで、市場のトレンドからは読みにくいといえます。基本的にキープの釣りなので、メタルジグは安定して使われていたようです。海アメである程度の経験値、情報量がすでに蓄積されていたので、海サクラはわりと早い段階で成熟市場になった印象です。

私たちが初めて海サクラをねらって北海道を訪れるようになった2000年頃は、聖地とされていたのが熊石、リザーブで後志利別川周辺のサーフといったエリアが主なフィールドでした。2021年、久々にフィールドに立った印象では、海サクラのアングラーはここ10年で5倍以上になったイメージです。メーカーとしては喜ばしいことですが、序盤から5月頃までの主戦場、函館から積丹半島までは、おおむね開拓されていて驚きました。

海サクラの新規参入アングラーの増加も、ここ4、5年は顕著なようです。海アメほどフィールド状況が厳しくなく、ポイントもサーフから地磯まで数多く、また、それなりに接岸が確認されているエリアなら初心者でも充分に釣れるので、参入組の定着率は高く、地元アングラーのレベルは高いようです。

この手の釣りに不可欠な「情報」はSNS、動画サイトなどを通じてオンタイムで入手しやすくなり、同時に使用されるルアーも昔ほど偏りはなくなっているようです。最近はロングミノーが定番化したと言われますが、河口が絡む地磯などでは昔からミノー使用率は高かったので、近年になって定番化したわけではないと思います。

魚が遠いときには……北海道限定メタルジグ『プレスベイト メタルカムイ』

海サクラ・海アメ専用のメタルジグ。『ビーチウォーカー フリッパー』というヒラメ用ジグと同じ理屈で作られた。フックを腹部にも付けられるのが特徴。35gと50gの2種があり、形状は同じだが35gは亜鉛がベース素材で、50gは純度の高い鉛を使用。どちらも飛距離は出る設計だが、ポイントがシャローで根掛かりが心配なときには35gがおすすめ。

Press Bait METAL KAMUY Z35

●サイズ：105㎜
●重量：35g
●価格：1,430円（税込）

Press Bait METAL KAMUY50

●サイズ：105㎜
●重量：50g
●価格：1,320円（税込）

DUO
POOL BAKKAN

魚を生かしておくのに最適な大容量マルチバッカン。75㎝のサクラマスでも入れることが可能なサイズで、リリース派のアングラーにおすすめ。魚の撮影も行ないやすい。内側のネットを閉めれば、魚を入れたままで水を替えやすい。年内発売予定。
●カラー：ブラック
●サイズ：67×26×22㎝